# ナルシシズムの病
## ——十八世紀イングランドにおける結核の表象——

鈴木晃仁

In the realm of fiction we find the plurality of lives which we need.
——Sigmund Freud, 'Thoughts on War and Death'

### 1　序論　医学史の文化論的転回と〈自己の病〉としての結核

過去三〇年間ほどの間に、欧米においても日本においても〈病の文化史〉と括ることができる医学史の研究ジャンルが急速に充実した。これらの研究の視点は多様であり、成果の水準には大きなばらつきがあるが、強いて共通点を見出すとすれば、病気の主観的経験や病気にまつわって作り上げられるイメージや表象といった、社会と文化の中で規定される側面に研究のアクセントをおいていることがあげられる。伝統的な医学史・疾病史の主たる関心が、医科学上の発見や治療上のブレイクスルー、あるいは疾病・罹患・死亡の実態といった、科学的な真理や客観的な事実の地平で病気の歴史を理解しようとしていたことに較べたとき、このような研究の重心の大き

なシフトを、〈言語論的転回〉（linguistic turn）に倣って、〈文化論的転回〉（cultural turn）と呼ぶことができるだろう。[1]

この研究ジャンルの中で、プロの医学史家によって書かれたものではないにもかかわらず古典的な作品になっている異色の文献が、一九七九年に単行本化されたスーザン・ソンタグの『隠喩としての病い』である。[2] この書物において、現代でも最も恐れられている病気であり彼女自身が経験したガンと対比してソンタグが分析したのが、二十世紀の半ばまで「死病」として人々に恐れられてきた結核である。ソンタグによれば、ガンが現在に至るまで否定的な隠喩を産み出し続けてきたのに対し、結核はそれが不治の病いであった時ですら肯定的な隠喩に取り囲まれていた。『椿姫』『魔の山』そしてジョン・キーツといった、我々に馴染み深い西欧文化のメガ＝アイコンの例が示すように、結核はその患者の美しさをいや増し、感受性を研ぎ澄まし、芸術的創造力を賦与するという神話はヨーロッパに定着していた。

ソンタグはこの対比を、簡潔だが示唆的な言葉で表現している。「結核は病んだ自己の病（the disease of the sick self）であり、ガンは他者の病（the disease of the Other）なのである」という文章がそれである。[3] ソンタグがここで軽く触れている〈自己〉（the Self）と〈他者〉（the Other）という枠組みは、近年の病気の文化史において多用され（時に濫用され）、豊かな洞察を産み出してきた概念装置の一つである。その中で、インパクトがある図像資料を用いて、病気の〈他者性〉の歴史学を精力的に開拓してきたのがサンダー・ギルマンである。ギルマンは『差異





と病理学』、『病気の表象』などの一連の著作において、狂気や梅毒といった病気のイメージが形成される歴史の基本的な力学を分析しようと試みている。彼の議論にはフロイトの精神分析学の影響が色濃く現われており、病気を他者化するダイナミクスの根底にあるのは〈不安〉である、というものである。個人と社会が、内なる無形の不安をこれらの病気とその患者に投影し、その不安に対象を与えて実体化することで境界線の向こう側に囲い込もうとした結果、これらの病気の恐ろしさやグロテスクな症状がことさらに強調される、というのがギルマンのシナリオの骨格である。ギルマンはさらに論を展開して、この線引きと囲い込みは〈健康〉という望ましい自己を構成するカテゴリーの一つを確立し強化する仕掛けの一つであったため、その他のカテゴリー――階級、ジェンダー、人種、民族など――も病気の他者化に動員され、下層階級や女性、黒人や少数民族、植民地の被支配民族などと、これらの恐れられた病気が結び付けられたのだ、と主張する。ギルマンによれば、病気の他者化は自己のアイデンティティをさまざまなチャンネルを通じて安定させるための文化的・社会的な強力な装置であった、というわけである。[4]

その一方で近年の病気の文化史は、〈自己の病〉としてポジティヴな意味を与えられた病気も少なくないことを明らかにしている。例えば十八世紀のイングランドからは、神経症と痛風という二つの例があげられる。倦怠感など漠然とした愁訴を主たる症状とする神経症と呼べる病気は「イギリス病」と呼ばれ、繊細な神経ゆえの高い感受性（sensibility）を持つ人々の病気であるとされ、また都市の富裕なライフスタイル、特にロンドンの美食と安逸と享楽に由来すると理解さ

れた。十八世紀の「ロンドンの憂鬱」は、ボズウェルらが密かな誇りをもって身にまとう病気であった。一方同じ時期の痛風は、コミカルな揶揄の対象になりながらも、名門の血統に代々伝わる病気であり、他の病気の原因となる悪液を体内から集めてくれる治療効果を持っているとさえ考えられていた。[5] 境界のあちら側に排除された〈他者〉の病気とは対照的に、十八世紀の神経症や痛風は、その患者たちによって自らのアイデンティティの内側に望ましい構成要素として積極的に取り込まれた病気であった。

極めて粗い一般化をすると、他者化の概念装置は、ガンや狂気、現代のＡＩＤＳといった病気、つまり難治であり相対的に悪性である病気の歴史を理解する時に有効であると言えるかもしれない。また、ペストやコレラなどの致死率が高く共同体の〈外部〉から侵入する劇的な流行病についても、他者化の力学が強く働いていたように思われる。[6] 一方、〈自己の病〉となったのは、伝染性が弱く罹患者の生命や社会生活を決定的には脅かさない病気であると言えるのかもしれない。しかし、そのような一般化の可能性は念頭に置きつつも、むしろこの方向の議論には極めて慎重になるべきだろう。こう言うのは結核がこの一般化にとって極めて不都合な、そして重大すぎる例外であるという理由があるからばかりではない。病気を社会的・文化的な全体性から切り離してその生物学的な症状や振る舞いにのみ着目し、それによって単純に他者の病と自己のそれに分ける二分法は、病気の文化論的な理解のためには著しく不十分な枠組みであるからである。同じ病気で、時代と地域に関係なく同じ（少なくとも類似の）振る舞いをするはずの病気に対して、歴





史的に全く違った隠喩が与えられることは、これまでの研究が既に繰り返し明らかにしている。ソンタグの〈自己の病〉の古典的な例である結核ですら、文脈によっては高度に他者化されることもあった。例えばカフカにおいて彼の結核とユダヤ性が重なっていたこと、一八八二年のコッホによる結核菌の発見に伴う伝染性の証明を一つの契機として、結核患者は隔離され収容施設で厳格な管理の対象になったこと、また大都市のスラムに居住する下層階級の貧困と不潔と道徳的未開状態のシンボルとして結核が機能したことなどは、既に優れた研究が指摘している。[7]

以上のような考察の方向と近年の研究成果は、ソンタグを否定するというよりむしろ、彼女が提示した結核という病気のパラドクスを浮き彫りにし、ある大きな疑問を浮かび上がらせているといえるだろう。すなわち、「結核という伝染性の死病であり高度に他者化されたこともあった病気が、「なぜ」美化されたのだろうか？という問いである。以下の議論が念頭に置いている大きな目的は、ソンタグが残したこの問いに答えることである。

より限定して研究史的にいえば、この小論のポイントになるのは、一つは時代区分の問題、いま一つは解答の方向の問題である。クロノロジーの問題で言えば、結核という疾病の歴史はそれこそ先史時代から辿ることができるが、これまでの研究が最も重視した時代は十九世紀である。ソンタグは幾度か十九世紀以前にも結核の隠喩が存在したことを示唆しているが、彼女が用いている資料はほとんど全てが一八〇〇年以降のものである。デュボスの結核の歴史は、るいれきについて軽く触れた箇所を別にすれば、キーツとともに幕を開けるといってもよい。エルズリッシュ

とピエレは、結核こそが十九世紀という時代を体現する病気であるとまで主張している。[8] 重要な医学上の発見（ラエネックの聴診器やコッホの結核菌）、公衆衛生上の大規模な政策（結核撲滅キャンペーンやサナトリウム建設）、結核で夭逝した天才芸術家（キーツやブロンテ姉妹）、結核に倒れた芸術作品上の登場人物（少女ネルやプッチーニのミミ）などが、十九世紀から二十世紀初めにひしめき合っていることを考えると、これまでの研究は圧倒的に十九世紀に重心をかけたものであったことは理解できる。しかし、これまでの十九世紀への研究の偏重は、結核の歴史の一つの面にのみ光が当てられその他の重要な面が無視されるという研究上の偏りを助長しただけではなく、十九世紀の顕著な芸術運動であるロマン主義が結核の美化を生み出したような誤解を生み出してきた。十九世紀が突然に結核の文化を作り上げたかのような印象を与えるこれまでの研究の見落としを補足し、十八世紀の豊かな結核の文化を分析して十九世紀との連続と断絶を描き直すことがこの小論の一つの主眼点になる。

解答の方向の問題については、ローゼンバーグのバランスが取れた示唆がこの小論の大まかな指針になる。[9] 即ち、結核という病気が持つ生物学的な振る舞いを無視することなく、しかしそれらに結核の隠喩の形成を還元しないこと、言葉を換えれば、疾病というエージェントを著しく軽視した社会構成論（constructionism）の蛮勇と、歴史的文脈を無視した本質論（essentialism）の素朴の双方から距離を取って、結核という疾病のもろもろの振る舞いから、何が選び取られて枠付け（framing）されたのかを考察する方向で議論を進める。やや意外なことに、ソンタグも含め





て結核の美化を論じたこれまでの研究が共有している一つの大きな欠陥は、その分析が静態的であり、上に触れた病気の生物学的な客観性の地平へと文化的な隠喩の問題を還元する傾向があることである。[10] 確かに、結核という疾病の生物学的ハードコアと呼べる症状上の特徴は、結核の美化された隠喩に大いに貢献した。例えば身体の上部に主として座を持つこと、緩慢に衰弱が進行すること、顔色が青白く透き通ったようになることなどは、病気を美化する重要な契機であった。しかし、以下に述べるように、結核の別の特徴や症状が用いられて、場合によっては正反対のイメージが構成された文脈やケースも存在することを考えると、これらの特徴は病気の肯定的なイメージがそこから自然発生する種子ではなく、イメージが構築されていくときに、結核という疾病のさまざまな特徴の中から選ばれて用いられたビルディング・ブロックであると理解するべきである。それだからこそ、ある時代と地域においてどんなメカニズムで結核を美化する文化が形を取ったのか、なぜ結核は自己を織り成していく際の重要な契機となったのか、という疑問はすぐれて歴史的な問いになるのである。

## 2　十八世紀の結核と患者の〈自己成形〉

パーゲルが指摘するように、結核を理解する医学的な大枠は十七・十八世紀においても古典古代の医学のそれと変わっていなかった。すなわち、腐った血液が肺に蓄積し、肺の内部組織が膿によって侵され、その結果身体がやつれ衰弱し死に至る、という過程である。[11] ここで用いられて

いる基本的なイメージは、明らかに腐敗と侵蝕のそれである。結核患者の身体は内部からただれてくずれ、血液―肺の組織―全身という過程で順に腐爛と消耗が拡大していくのである。十九世紀にその病変（tubercle）から結核（tuberculosis）と呼ばれることになった病気は、十八世紀にはphthisisまたはconsumptionと呼ばれていたが、これらの言葉には「腐蝕」という意味があり、そこには〈膿血から始まって肺が腐蝕される病気〉という病理学の理解が反響している。[12] こういったプロセスを経て結核で膿んだ肺に対して、十八世紀の医者たちは、しばしば憎悪に近い不快感をあらわにしている。十七・十八世紀を通じてしばしば引用された*Theatrum Tabidorum*（1654）の著者クリストファー・ベネットは、肺の内部がどろどろの「汚らしい滓」のようになった例を紹介している。[13] そのような肺から吐かれる患者の息は腐臭を放つことになり、ファン・スイーテンは膿と痰を吐く若者を診療した時には悪臭のあまり息もできないほどだった、と述べている。[14] 医者たちのイメージの中で結核のおぞましさはさらに発展させられ、この腐臭は毒性と伝染力を持っていると信じられる。この時代の高名な解剖学の教師たちが結核で死んだ患者の死体を解剖することをためらい恐れていたことを、さして罪や恥の意識もなさそうに告白しているのは、医者たちの間に結核で腐敗した肺への嫌悪感が広範に共有されていたためかもしれない。[15] この血液と肺の腐敗のメタファー、毒性と伝染性を持つ汚穢のイメージが、道徳的な堕落の象徴としての梅毒のメタファーへと転換されたことは容易に想像がつく。ジョヴァンニ＝バッティスタ・モルガーニが、自らが観察した売春婦の結核患者において結核と梅毒が合併して身体の腐敗と消耗が





徹底的に進み、「死後の身体には乳房の痕跡は全く見当たらず、わずかに乳首だけが見分けられる程度だった」と述べていることは、梅毒に代表されるような身体と道徳の腐敗の記号として、結核をネガティヴに解釈することもありえたことを示唆している。[16] 結核も梅毒も患者の口からの悪臭で悪名高い病気であり、実際二つの病気が混同されることもあった。一六六四年三月にサミュエル・ピープスの弟のトムが肺病（consumption）で死んだときに、医者は実は患者は梅毒なのだという噂を立て、ショックを受けて憤慨したピープスは別の医者を連れてきて弟の口の中と性器を調べて真相を明らかにして医者に謝罪させ、弟と家族の名前に傷がつかないように努力した。[17] このエピソードは、結核と梅毒を判断する境界は曖昧であったことを示している。

このように、十七・十八世紀の結核の病理をめぐる病理解剖の領域における言説は、その腐敗と汚染に対する嫌悪感を中心に、結核のけがらわしい汚穢の他者性を強調するようなホラーストーリーを物語っていた。しかしながら、医科学者たちが展開させていたこういった結核にまつわるネガティヴな隠喩は、十八世紀における結核の文化の全体を覆い尽くしていたわけではない。身体の腐蝕の病理学の言説と並行して、結核をポジティヴに捉える伝統、より具体的には結核を患いそれによって死に至ることを歓迎する実践も存在していた。すなわち医者による病理学の領域では他者化されていたが、それを病む患者の側からは美化、あるいは馴化があった、という基本的な構図を考えることができる。言葉を換えると、結核の病理学的な理解から生成された隠喩群と、結核という病気を生きそして死ぬことをめぐる隠喩群は、医療にとって基本的な医者＝患者

という二項関係と重なり合っており、どちらかがどちらかを完全に圧倒したり吸収したりするのではなく、緊張し対立し牽制しあい影響を与えあいながら、二つが併存するという関係にあった、と言ってもよい。

結核と「望ましい死」「善良な死」の伝統も古典古代まで溯ることができる長い連続がある。古典古代の結核の文化は管見が及ぶ範囲では本格的な研究はされていない問題であるが、十七・十八世紀から観た時の連続と対比の観点から見て特に重要なのは、結核が英雄的な壮烈な死という文脈にはめ込まれることがあったことである。プルタルコスが描くマケドニア王アンティゴノス三世の結核による死は古代の戦士の美学を体現したかのようなものである。

彼［アンティゴノス］の肺は既に冒されていたが、病いに屈することなく、蛮人たちを屠りながら勝利の中で栄光に満ちて息絶えることを願って戦場に赴いた……そして彼が闘いの雄叫びを上げた時に、肺が破れて死んだ。あるいは別の物語によれば、勝利を収めた後に『なんと素晴らしい日！』と歓びのあまり叫んだときに肺を破ったということだ。[18]

これと共通する結核による死の理想は、モリエールの死の模様にも伺うことができる。『病は気から』の初演の夜、病を押して出演していたモリエールは舞台上で痙攣性の咳の発作を起こし、その時に肺が裂けてしまった。しかしモリエールはむりやり笑って喀血をごまかして舞台を務め





上げ、幕が引かれてから自宅に運ばれて半時間もせずに息絶えたという。[19] こういった物語は、喀血という症状に焦点を当てて、結核を戦士の美学と公共の義務の倫理を物語るドラマの中に嵌め込んでいる。すなわち、公の義務を遂行するために病気による消耗と限界点まで闘い、病に冒された肺がついに爆発してその場で血を吐いて倒れるという理想である。

十八世紀のイングランドにおけるこのタイプの結核による死の物語には筆者はまだ出会っていない。結核に限らず、古典古代の美徳の理想像が、ホメロスの英雄やローマの将軍たちの戦士のエトスから、市民的な人文主義のそれに変わっていったことなどから、病の消耗に限界まで耐えた結果の壮烈な死の理想そのものが衰退していたのだろう。[20] こういった死の理想が生き延びつつも、すでに古めかしいものになりつつあったことは、ヘンリー・フィールディングが結局彼の命を奪うことになった「黄疸と水腫と喘息」について語った言葉からも伺える。フィールディングはバースへの転地療法を願っていたにもかかわらず、ミドルセックスの治安判事としての公務のためロンドンを離れることができなかった。その状況に触れて、フィールディングは『リスボン航海記』の中で、「公衆のために自ら進んで犠牲になるような、いにしえの英雄たちの仲間入りをしたような気分になった」とややおどけて書いている。フィールディングはいにしえの英雄たちの死の模様を知っているし、それと自分を重ね合わせることもできる。しかし彼がこの文化に距離感を感じていることは明白である。[21]

そして、フィリップ・アリエス、ジョン・マクマナーズ、ロイ・ポーターらが示したように、

理神論に一つの理論的到達点を見出すような、合理的で抑制が効いたキリスト教が広まった十八世紀のイングランドとフランスは、死の床のドラマが大きく変化した時期であった。すなわち、臨終の苦痛に雄々しく耐えて悔い改めながら死んでいく「死の技法」[22]が、アヘンに助けられた苦痛のない安らかな眠るような死の理想へとシフトしていったのである。この新しい死の理想へと結核という病気がはめこまれ、新しい意味を与えられて解釈されることになったのが、結核の美化の歴史において極めて重要な契機であった。

結核を新しい枠組みの中で新しい意味付けをする文化的な変容の中には、戦士の美学のドラマにおいてはクライマックスであった喀血とは異なった症状を中心にして病気の隠喩を組み立て直すということも含まれていた。病気の激しさと勇者の雄々しさの記号となった爆発的な喀血に代わって、安らかな死の理想にはめ込まれた結核の隠喩の結節点になった症状は、〈緩慢に進行するやつれと消耗〉であった。一六五六年に国教会の聖職者のトマス・フラーは説教の中で「汝の病は結核なのか？確実に死をもたらす病ではあるが、結核こそ、我々に差し向けられた死の使いの中で、最も礼儀正しく（with civility and courtesie）我々を扱う病であることを知るがよい」と説いている。[23] フラーが言う「礼儀正しい」とは、耐え難いほどの激痛を伴う病気（例えばガン）や、死の間際に錯乱を惹き起こしてしまう高熱性の病気とは違って、結核の場合は死にいたる苦痛をなんとか管理できる、といった意味であろう。[24] また、結核はペストや天然痘のような急激に侵襲する流行病や戦場の死のような集合的な死の形をとらず、患者は個人として死を迎えること





ができる、ということとも関係あるだろう。[25] 医者にして作家のトマス・ブラウンが一六九〇年に書いた「友人への便り」は、結核に罹ったある友人の「死のようには思えない安らかな旅立ち」を描いて十八世紀の新しい死の理想のキー・テクストになった著作であるが、その中で描かれているのはほとんど苦痛がないまま徐々にやつれて衰弱して死に至るような病気である。[26]

新しい結核の死の理想を詳細に検討できる資料が、後に法務長官（Attorney General）となりサーの称号を持つことになるダドリー・ライダー（Dudley Ryder）が、ロンドンのミドル・テンプルで法律を学ぶ二十四才の学生であった頃、年代で言うと一七一五年から十六年にかけてつけていた日記である。[27] 彼は総じてやや心気症の気があり、非正規の医者の売薬を試してみたり、当時流行しはじめていたイズリントンの鉱泉に通ったりしていたが、そんな彼はしばしば結核による死を恐れることがあった。[28] 一七一六年四月一日の月曜日、彼はこのように書いている。「喉がだいぶいたい。結核になるような風邪を引いたのではないだろうか。そんな風邪から結核になることもあると聞いたから。[29]」

しかし、このように結核を恐れる一方で、結核による死にはメリットもあることを彼は知っていた。同年六月二十五日に、結核のため死の床に就いていた友人のウィリアム・クリスプを訪問したことをライダーは日記に記している。まるでブラウンの書物に現われるような静かな諦念と宗教心に満ちた穏やかな死をクリスプが迎えていることにライダーは強い感銘を受け、その日の日記にクリスプの模様を詳しく記入している。

［ウィリアム・クリスプは］回復の見込みはもうすでになく、私たちと話しをした。彼は非常に真摯にあの世のことを話題に登らせ、旅立ちの準備をしようとしていた。宗教を堅く信じこの世への執着を克服し、死を恐れたり取り乱したりすることなく迎えられるというのは、人間として幸せなことである。[30]

さらにクリスプの母親は、病気のどんな特徴が息子のキリスト教徒らしい穏やかな諦念に満ちた死を可能にしたかということにも言及し、ライダーはそれを「［母親は］息子の病気が長引いたので（such a lingering sickness）悔い改める時間が十分にあったことを神に感謝していた。」と書きとめている。[31] 病気の進行の緩慢さゆえに「死の支度」ができることが、結核による死を肯定的に捉える一つの理由であった事情を伺える内容になっている。

クリスプの死から三ヶ月後の日記に、彼は例のごとく自分の体の不調に過敏になり、自分が結核になったのではないかと疑う。しかし、今度は彼の結核への知覚は友人の死に大きく影響され、結核の死のイメージがライダーの中で発展させられ、理由付けまでされて完成されたことが分かる。

十月十一日、火曜日、……一人になった時、死を想った。肺のあたりが重いような感じがしたから。結核になったのだろうか。そう考えてみて満足に近いものを感じた。少なくともそこには見苦しいものは何も現われないし、もし死ぬことがはっきりと分かるのならば、静穏に人生に別れを告げられると想う。[32]





クリスプの母親が挙げていた、死の準備をする時間を与えてくれるようなゆっくり進行する、という特徴以外に、ダドリーはまず「見苦しいものが何も現われない」こと（"nothing shocking appeared in it"）を挙げている。＜真っ赤な血を吐いて倒れる病気＞という特徴づけとはまるで正反対の、病気としての症状が何もなくただ衰弱して消耗していくという性格付けを結核に与えているのである。次には＜死を確実に予想できる病気＞（"if I was plainly in a dying condition"）という特徴にライダーは着目している。予後が曖昧で、回復の希望と死の恐れの間に患者を宙吊りにするタイプの病気と違い、結核はそれが確実な死をもたらす病気であるだけに、病気の早い段階で不安に苛まれる宙吊り状態から解放されて、クリスプの母親が言うように、死のための準備をする十分な時間がある、というのである。

ライダーにおいて結核の死を美化する基本的な駆動力になっていたのは、啓蒙期の新しい死の理想像であることを強調しなければならないだろう。ライダーの例が結核の肯定的な隠喩の形成過程について教えてくれることを、ここまでの段階で整理すると次の三点になる。（1）ロマン主義による結核の芸術的な美化が始まる一世紀も前から、結核の美化は始まっていたこと。（2）

それは〈安らかな死〉という死の理想の文脈で行われたこと。（3）その際、注目の対象となる症状が、古典古代の壮烈な死をシンボルした激発的な喀血から、緩慢だが避けられない死に至るゆるやかな衰弱と消耗になったこと。

しかし、十八世紀イングランドの結核の隠喩は厳粛な死の文化の中だけで形成されたのではなかった。少なくともルネサンスまで溯ることができる伝統の中で、結核というのは恋する男の病であった。一五九八年に出版されたロバート・トフトの『アルバ　メランコリーな恋をするものの月々の心』がこの伝統の中にある。

私のこころは病み、からだは衰えている
疑いながら愛し、息をすることすらできない
不安と希望の極端のはざまにおかれて
長いこと奇妙な結核で私はやつれ
癒しの真珠をずっと切望してきた

Sick is my soule, my Body languisheth,
So as I doubtfull love, scarce drawing breath,
Twixt feare and hope in this extremitie.





A strange Consumption hath me wasted long,
And for a Pearl restorative I long.[33]

ここで詠われている結核（consumption）は、医科学者たちがいう身体の内部からの腐敗ではない。恋の熱と炎に焼かれて身体が燃え尽きていく、あるいは蒸発していくという意味合いの「恋のやつれ」である。phthisis, consumption のどちらも、身体を内部から観たときの「腐敗」という意味と同時に、身体を外側から観たときの「消耗」「憔悴」[34]という意味も持っており、この多義性をもとにして異なった隠喩が生成されているのである。

この恋の病としての結核という隠喩は、膿血による肺の侵蝕の病というメタファー、そして厳粛な死の理想を実現してくれる病気というメタファーと並行して存在していた。先に分析したライダー自身も、「恋の病」と「安らかな死の病」という異なった二つのイメージを状況に応じて使い分けている。当時独身で女性とのロマンスに焦がれており、サリー・マーシャルという女性に一方的な熱愛をしていたライダーにとって、トフトが描くような恋にやつれる男性と自らを同一視することは極めて自然なことであった。同年の七月、マーシャルにかなり惨めな仕方で振られた後、日記に次のように記している。

七月二十二日、日曜日、……夕食の時、急に気分が優れなくなり、私の思いはマーシャルさ

んのことでいっぱいになってしまった。彼女に逢いたくなり、彼女ゆえに力が抜けてしまった。彼女を想ってやつれ、重い病気になったらどうだろう、と考えてみた。そうすれば彼女は私を憐れんでくれるかもしれない。彼女の愛によって私を死から救おうとしてくれるかもしれない。そうしたら悦楽で有頂天になるだろう！そうすれば私の病気などすぐ癒って生き返るだろう。[35]

ライダーにとって「やつれ」はロマンティックな恋の病の証であった。彼の愛情をつれない女性に伝え、彼女の心を変えるためのラヴレターとして自らの身体を用いたと言ってもよい。ここでの結核は死の病気というより、むしろその緩慢な進行ゆえに、状況を操作して（この場合だと女性の心を変えさせること）死を逃れるだけの時間的な余裕がある病気という都合のよい性格付けがされている。

それ以上に重要なことは、彼のやつれていく身体を眺めてそれが発するメッセージを受取るのは、マーシャル嬢というよりむしろ彼自身であった、ということである。ライダーはここでナルシシスティックな白昼夢の中で恋と病でやつれた自分を思い描き、マーシャル嬢と自らのロマンティックな死の床のラヴシーンを空想し、それをハッピーエンドで終らせている。日記のこの部分の記載には、自己憐憫の甘い快楽だけでなく、自作自演のドラマの主人公を演じた満足が漂っている。そしてここで「演じた」という言い方をしたのは単に比喩的な意味ではない。ライダーの記載はシェイクスピアの『から騒ぎ』の末尾におけるベアトリスの台詞と呼応しているからで





もある。この小生意気だが魅力的なヒロインは「君がかわいそうだから」とへらずロを叩いて結婚の申し込みをしたベネディックに、「私、断りきれずに承知するのよ、それと一つには、あなたの命を助けてあげるため、だってあなたは胸を患っていらっしゃるそうだから。」と応酬している。[36] 結核（原語はconsumption）の男からの愛に応えて命を救う、という主題を『から騒ぎ』とライダーの白昼夢のドラマは共有しているのである。これは、ライダーがこの作品を観てそれに影響されたというよりも（その証拠は日記の内部にはない）、ライダーにとって彼の想像上の結核が、現実の世界からドラマの世界に入っていくための仕掛けになっていたことを示唆していると読むべきだろう。彼自身の自己を望ましい形に想像上で成形し、現実から逃れて自らの欲望を満たすという快楽を引き出した時に、彼が用いた文化的な装置が、結核患者のように恋でやつれた自らの身体であった、というわけである。消耗した身体というのは、自らが主演するフィクションとファンタジーの世界に入っていくために必要な「装い」であり、その意味で結核が〈自己の病〉であったことが、ライダーの白日夢の分析から明らかになる。

この結核を中心とする白昼夢の中の芝居がどの程度実際に広範に行われたのかはわからないが、幾つかの断片的な証拠は、ライダーは決して孤立した例ではなかったことを示唆している。R・B・シェリダンの最初の妻で歌手のエリザベスは、彼女が結核で死を迎えようとしていた時、ピアノの前に座らせてもらいたいと夫に頼み、何曲か奏でながらやつれた腕にとめどなく涙をこぼしたという。これはエリザベスにとってただのセンチメンタルな行為ではなく、ジョシュア・レ

ノルズに描いてもらった聖シシーリアに扮してピアノの前に座る往日の肖像画を再現する自己演出であった。この演劇的な行為の意味は、少なくともその場の観衆であった彼女の夫には明確であり、シェリダンは友人に宛てた手紙の中で「妻は自らのポートレイトの影のように見えた」と記している。[37] このエピソードが語っているのは、自らの病気と死、特に結核による病気と死を、フィクションをモデルにして「作品化」して、その主人公を演ずることはライダーの夢想に限られたことではなかった、ということである。

十八世紀には、消耗しやつれた身体をまとってフィクションの空想世界に入っていくこと、即ち結核とそれと類似した症状を自己成形の仕掛けとして用いることが広まっていたのではないかと推察できる状況証拠が多くある。消費社会の誕生と拡大にともなって、文学や工芸などの質が高い芸術作品を比較的広範な人々が享受することが可能になり、それと相関して、文学作品に自己を重ね合わせるだけの高い読解力と想像力を持った読者層は拡大した。[38] つまり、ジョン・ブリューワ言うところの「想像力の快楽」が広範な層に可能になったのである。こういった状況を背景にして、自らの身体を想像上で（あるいは現実に）あるモデルにあてはめることで、ナルシスティックなファンタジーの世界で主人公を演じるだけの能力を持った人々が増加し、またフィクションの側でも、登場人物との自己同一視に読者を誘うような内容のものが広がったことを意味したと考えられることができる。ここに、しばしば指摘されている、十八世紀における望ましい身体像の変化が加わったことが、結核が〈自己の病〉になるのにクルーシャルであった。身体の消耗と





やつれとは、言葉を変えればスリミングである。細身の身体が十八世紀にポジティヴな意味を与えられたこと、特に「繊細な感受性」を「華奢な神経繊維」によって表象する仕掛けによって、痩身が社会的・文化的なエリートのしるしであると考えられたことは、結核患者の身体（或いは結核患者のような身体）を美化する文化にうまく合致した。[39] 言葉を換えれば、十八世紀に顕著なボディ・プロジェクトの一つは、病でやつれたかのような身体を獲得してフィクションの世界へと参加することであった。[40] 十八世紀の終りに活躍したブリストルの医師トマス・ベドウズは、まさにこのようなシナリオで当時の結核の〈自己の病〉化を説明している。ベドウズによれば、中上流の女性の間に広まっているスリムな身体の重視は彼女たちの体質を結核に罹りやすいものにしており、また「ロマンス小説の作家は、無知からなのか、それとも物語に都合がいいからなのか、結核患者の緩やかな死を、想像力に心地好く惨めさが感じられないようなものに仕立て上げている」と、結核の蔓延とその美化の原因を小説の流行に求めている。[41] ここでベドウズが記述している「フィクションとの同一視のためのボディ・プロジェクトの仕掛けとして、結核に病む（あるいは病んでいるような）身体の獲得が広まった」という過程を、歴史上現実に働いていた力としてどの程度額面通り信じていいのか、というのは難しい問題であるが、しかし、少なくとも上に分析したライダーやシェリダン夫人の例は、ベドウズが述べているシナリオに見事に合致している。

後にバイロンが残した有名なエピソードであり、結核の文化史の中で必ずといっていいほど引用される場面も、この脈絡の中で解釈するのが適切である。

鏡を覗きながらバイロンは呟く。「顔が蒼いな、肺病で死にたいものだ」。なぜ?と訊いたのは、一八二八年二月、パトラスにバイロンを訪問した友人のトム・ムーアである（彼自身も結核だった）。「ご婦人方が仰有るからさ、『バイロンさまをご覧になって。おなくなりになる姿まで興味つきないお方』とね」[42]

この場面を、例えばデュボスのように、ロマン派の詩人たちが結核に憧れていたことを示すものと最もナイーヴなレヴェルで解釈するのは、バイロンの二重のアイロニーと、既に広範な人々が行うようになっていた結核の美化の歴史を捉えそこなっている。ここでバイロンは、当代一流の貴族的パンク、そしてハイ・カルチャーのアイドルの高みから、ライダーの白昼夢に象徴される結核はロマンティックであるという凡人たちの思い込みを演じて見せて、その文化を揶揄していると解釈するのが妥当だろう。さらに、ムーアがこのエピソードを紹介したすぐ後に書きとめているように、バイロンはこの時期にも日に三度の入浴や食餌制限、酢を飲むなどの努力で「ダイエット」をしていたことを考慮すると、バイロンの揶揄はダイエットと痩身に明け暮れて性的な魅力を保とうとしている自分自身にも向けられていると考えられる。[43] 伝統的に虚栄の象徴であった「鏡」という小道具が、結核を美化するナルシスティックな文化への揶揄を、バイロン自身に反射させているかのような、二重に仕組まれたアイロニーがこの場面に込められていると解釈





するのが妥当であろう。[44] この二重のアイロニーの一方が、世紀を隔てたライダーに向けられ、そしてもう一方がバイロン自身に向けられているかのような歴史的な構図は、十八世紀と十九世紀、啓蒙主義とロマン主義における結核のナルシシズムが連続する局面を照らし出している。異性愛と自己愛の鍵になる小道具としての結核の美化は、ロマン主義によって始められたのではない。ライダーにとって白日夢の中の幻想であった文化が、バイロンによってパブリックな形で揶揄されつつ実践されるようになったのである。

## 終りに

この小論の一つの基本的な主張は、「結核の世紀」とも呼ばれる十九世紀とロマン主義以前にも、十八世紀のイングランドでは結核の美化が進展しており、十九世紀との連続を辿ることができるというものであった。そのためにこれまで結核の歴史の中で注目されていなかった資料のハイライトを紹介する、ということがこの論文の一つの大きな目的である。結核の美化はデュボスやソンタグが注目する十九世紀よりはるか以前に始まっていること、十八世紀にはこれまで結核の文化史家が知らなかった豊かな結核の美化が定着していたというこの論文の一つのテーゼについては十分な証明を与えることができたと考えている。もう一つの目的は、これまでの記述的・静態的な結核の美化の歴史に欠けている、「どのようにして」「なぜ」結核は美化されたのか、という問題を正面から取り上げて、それに対する一つの可能な解答を示そう、ということであった。

十八世紀におけるこのダイナミクスについての本論の議論をここでそのまま繰返すことはしないが、敢えて強調したい点を二つだけ繰り返すと、一つは結核の美化のイニシアティヴは十八世紀の〈患者〉が取ったということである。その意味で、十八世紀の結核の美化はナルシズムの歴史の中で理解できるといえるだろう。いま一つは、死の理想の問題を別にすれば、文学作品などのさまざまなタイプの文化的なコモディティが患者の〈自己〉の病〉としての結核の隠喩の形成に極めて重要な役割を果たしたことである。ナルシズムと医学的な言説が絡み合いながら、結核患者の〈自己〉が消費社会の中で形成されていったことの重要性が、この小論文が検討した資料からあぶりだされてきたと言ってよいだろう。

この小論の内容の一部は、筆者とClark Lawlor共著の"Disease of the Self : Representing Consumption, 1700–1830", *Bulletin of the History of Medicine*, 74 (2000), 458–94に加筆・修正したものである。

注

(1) この30年ほどの病気の文化史の研究方向の大きな総括については、Charles E. Rosenberg, "Introduction", in Charles E. Rosenberg and Janet Golden eds., *Framing Disease : Studies in Cultural History* (New Brunswick, New Jersey : Rutgers University Press, 1992), xiii–xxvi.

(2) Susan Sontag, *Illness as Metaphor* (New York : Vintage Books, 1979) 富山太佳夫訳『隠喩としての病い』(東京：みすず書房、一九八二)

(3) Sontag, *Illness as Metaphor*, p.66.

(4) Sander L. Gilman, *Disease and Representation : Images of Illness from Madness to AIDS* (Ithaca, New York : Cornell University Press, 1988) ; *idem*, *Difference and Pathology : Stereotypes of Sexuality, Race, and Madness* (Ithaca, New York : Cornell University Press, 1985).

(5) See *The English Malady : Or, a Treatise of Nervous Diseases of All Kinds* (London : G. Strahan, 1733 : rept. with introduction by Roy Porter, London : Tavistock/Routledge, 1991) ; Roy Porter and George Rousseau, *Gout : The Patrician Malady* (New Haven : Yale University Press, 1998) ; Lawrence Rothfield, "'Gout as Metaphor'," in *History, Art, and Antiquity of Rheumatic Diseases* (Brussels : Elsevier and the Erasmus Foundation, 1987), pp.68–71.

(6) Alison Bashford and Claire Hooker eds., *Contagion : Historical and Cultural Studies* (London : Routledge, 2001).

(7) Sander Gilman, *Franz Kafka, the Jewish Patient* (London : Routledge, 1995) ; Katherine Ott, *Fevered Lives : Tuberculosis in American Culture since 1870* (Cambridge, Mass. : Harvard University Press, 1996), pp.100–134 ; Linda Bryder, *Below the Magic Mountain : A Social History of Tuberculosis in Twentieth-Century Britain* (Oxford : Clarendon Press, 1988).

(8) René and Jean Dubos, *The White Plague : Tuberculosis, Man, and Society*, foreword by David Mechanic, introductory essay by Barbara Gutmann Rosenkrantz (New Brunswick : Rutgers University Press, 1992) ; Claudine Herzlich and Janine Pierret, *Illness and Self in Society*, trans. Elborg Forster (Baltimore : The Johns Hopkins University Press, 1987), p.24.

(9) Rosenberg, "Introduction", in Rosenberg and Golden eds., *Framing Disease*.

(10) See, for instance, Sontag, *Illness as Metaphor*, pp.11–16.

(11) Walter Pagel, "Humoral Pathology : A Lingering Anachronism in the History of Tuberculosis," *Bulletin of the History of Medicine*, **29**(1955), 299–308. See also Lester S. King, "Consumption :

The Story of a Disease," in Lester S. King, *Medical Thinking : An Historical Preface* (Princeton, New Jersey : Princeton University Press, 1982), pp.16–69. Gerard van Swieten, *Commentaries upon Boerhaave's Aphorisms*, 18 vols. (Edinburgh : Charles Eliot, 1776), 12 : 1 が、十八世紀の結核の理解とその古典医学との連続を典型的な形で示している。

(12) 歴史的な病気の呼び方とその翻訳というのは頭が痛い問題だが、ここでは十八世紀に使われていた phthisis と consumption という語に対し、あえて「結核」という語をあて、文脈によって適当に言い換えるという方針をとった。福田真人「病とそのイメージ：結核の比較文化史序説」草光俊雄他編集『英国をみる　歴史と社会』（東京：リブロポート、一九九一）は、phthisis, consumption, tuberculosis という三つの語を訳し分けて、それぞれ「肺労」「肺病」「結核」という訳語をあてている。

(13) Christopher Bennet, *Theatrum Tabidorum* (1654), cited in van Swieten, *Commentaries*, 12 : 131.

(14) van Swieten, *Commentaries*, 12 : 130. See also G. L. Bayle, *Researches on Pulmonary Phthisis*, trans. William Barrow (Liverpool : Longman, Hurst, Orme, and Brown, 1815), p.125.

(15) van Swieten, *Commentaries*, 12 : 131 ; Giambattista Morgagni, *The Seats and Causes of Diseases, Investigated by Anatomy*, 3 vols., trans. by Benjamin Alexander (London, 1769), 1 : 646.

(16) Morgagni, *The Seats and Causes of Diseases*, 1 : 652. この結核患者の腐臭とその性病とのエコーは十九世紀にも見出される。Burney I. Yeo, "On the Results of Recent Researches in the Treatment of Phthisis," *Brit. Med. J.*, 1877, *i* : 159–60, 195–197

(17) Samuel Pepys, *The Diary of Samuel Pepys*, 10 vols., ed. by R.C. Latham & W. Matthews (Berkeley : University of California Press, 1970–83), 5 : 81–85.

(18) van Swieten, *Commentaries*, 12 : 36. 少なくともこの逸話を紹介したスイーテンは王の病気を結核であるという「遡及的診断」をしている。

(19) van Swieten, *Commentaries*, 12 : 91 ; John Palmer, *Molière : His Life and Works* (London : G. Bell and Sons Ltd., 1930), p.402.

(20) J.G.A. Pocock, *The Machiavellian Moment : Florentine Political Thought and the Atlantic Republican Tradition* (Princeton, New Jersey : Princeton University Press, 1975) ; Ronald Paulson, *The Beautiful, Novel, and Strange* (Baltimore : The Johns Hopkins University Press, 1996).

(21) Henry Fielding, *The Journal of a Voyage to Lisbon*, edited with an Introduction and Notes by Tom Keymer (Harmondsworth : Penguin, 1996), p.14.

(22) Philippe Ariès, *The Hour of our Death*, trans. H. Weaver (Harmondsworth : Penguin, 1983) ; John MacManners, *Death and the Enlightenment : Changing Attitudes to Death among Christians and Unbelievers in Eighteenth-Century France* (Oxford : Oxford University Press, 1981) ; Dorothy Porter and Roy Porter, *Patient's Progress : Doctors and Doctoring in Eighteenth-Century England* (Cambridge : Cambridge University Press, 1989), pp.147–152.

(23) From Thomas Fuller, "Sermon——Life out of Death," cited in Robert Southey, *Southey's Common Place Book*, 4 vols. (London : Longman, Brown, Green and Longmans, 1850), 4 : 353.

(24) Pat Jalland, *Death in the Victorian Family* (Oxford: Oxford University Press, 1996), pp.59–76.

(25) Herzlich and Pierret, *Illness and Self in Society*, pp.3–37.

(26) Sir Thomas Browne, "A Letter to a Friend, upon the occasion of the Death of his Intimate Friend,"*Sir Thomas Browne : Religio Medici and Other Works*,ed.L.C. Martin (Oxford : Clarendon Press, 1964), pp.177–96. この書物が19世紀のアメリカでも読まれていたことについては、Ott, *Fevered Lives*, p.15.

(27) William Matthews ed., *The Diary of Dudley Ryder, 1715–1716* (London : Methuen and Co. Ltd., 1939).

(28) *The Diary of Dudley Ryder*, pp.276–78, 295–98. 18世紀の患者の歴史一般については、Dorothy

Porter and Roy Porter, *In Sickness and in Health : The British Experience 1650–1850* (*London : Fourth Estate, 1988*) ; *idem*, *Patient's Progress*.

(29) *The Diary of Dudley Ryder*, p.209. スイーテンは、痰に血が混じっていたときに結核ではないかと恐れたという患者、そして彼自身の例を詳細に記述しており、ライダーの記述と併せて考えると、「結核ノイローゼ」によるものが十八世紀に比較的広く存在したのかもしれないと考えられる。See van Swieten, *Commentaries*, 12 : 5.

(30) *The Diary of Dudley Ryder*, p.263. 一方で、彼の死に対する態度は一定していたわけではない。see *ibid*., pp.188, 291, 294, 339.

(31) *Ibid*., p.234.

(32) *Ibid*., p.345. 準備されていない死くの恐怖は、過去のヨーロッパ社会にほぼ普遍的であった。See Ariès, *The Hour of Our Death*, pp.10–13 ; Jalland, *Death in the Victorian Family*, pp.65–69.

(33) Robert Tofte, *Alba. The Months Minde of A Melancholy Lover* (London, 1598), pp.277, 139.

(34) Richard Blackmore, *A Treatise of Consumptions and other Distempers Belonging to the Breast and Lungs*, 2nd Edition, Corrected, (London : John Pemberton, 1725), p.1 では、非専門家は消耗一般を、医者は肺の病気をconsumptionという、と述べられている。

(35) *The Diary of Dudley Ryder*, p.281.

(36) *Much Ado about Nothing*, Act 5 Scene 4.

(37) Cecil Price ed., *The Letters of Richard Brinsley Sheridan*, 3 vols.(Oxford : Oxford University Press, 1966), 1 : 247.

(38) John Brewer, *The Pleasures of the Imagination : English Culture in the Eighteenth Century* (London : HarperCollins, 1997) ; J. Paul Hunter, *Before Novels : The Cultural contexts of Eighteenth Century English Fiction* (New York : W.W. Norton & Company, 1990).

(39) Roy Porter, "Introduction", to George Cheyne, *The English Malady* ; Akihito Suzuki, "Anti-Lockean Enlightenment? : Mind and Body in Early EighteenthCentury English Medicine," in *Medicine in the Enlightenment*, ed. Roy Porter (Amsterdam : Rodopi, 1995), pp.336–59.

(40) Body Project という言葉と概念は、Joan Jacobs Brumberg, *The Body Project : An Intimate History of American Girls* (New York : Random House, 1997) に依った。

(41) Thomas Beddoes, *Essay on the Causes, Early Signs, and Prevention of Pulmonary Consumption for the Use of Parents and Preceptors* (Bristol : Biggs and Cottle, 1799), p.6. ベドウズと結核については、Roy Porter, "Consumption : Disease of the Consumer Society?" in *Consumption and the World of Goods*, eds. John Brewer and Roy Porter (London : Routledge, 1993), pp.58–81 ; *idem*, *Doctor of Society : Thomas Beddoes and the Sick Trade in Late-Enlightenment England* (London : Routledge, 1992). 医者たちのこのスタンスは1882年の *Lancet* 誌にまで連続している。See Jalland, *Death in the Victorian Family*, p.40.

(42) Cited in Dubos, *The White Plague*, p.58 ; originally in Wilfred S. Dowden, ed., *The Journal of Thomas Moore, 1826–30* (Newark : University of Delaware Press, 1986), pp.1119–20. Entry dated 19 February [Tuesday] 1828. 本文の引用はソンタグ『隠喩としての病い』46–7頁の富山太佳夫訳を拝借した。

(43) これらの事例から、バイロンがanorexia nervosaであると「診断」する医者もいる。Walter Vandereycken and Ron van Deth, *From Fasting Saints to Anorexic Girls* (London : Athlone Press, 1994), pp.227–8.

(44) 当然のことながら結核をネガティヴに捉えた患者やその家族も存在した。その「醜さ」が強調されている例を挙げると、Wilmarth Sheldon Lewis ed., *The Yale Edition of Horace Walpole's Correspondence*, 48 vols. (New Haven : Yale University Press, 1937–1983), 21 : 451 ; Horace Bleackley, *The*

*Beautiful Duchess : Being an Account of the Life and Times of Elizabeth Gunning, Duchess of Hamilton and Argyle* (London : John Lane the Bodley Head Ltd., 1907), pp.239-40ばえじあるで